

記念講演

「本との旅路 —これまでと、これから—

講師 上橋 菜穂子



「今年の講演は上橋菜穂子先生にぜひ、お願いしたい。が、お忙しい先生が果たして引き受けてくださるだろうか？」

出版社に連絡を取り、上橋先生へ依頼のメールを差し上げたところ、幸運にもお引き受けいただくことができました。

記念講演にご来場いただいたみなさまもお感じになったと思いますが、上橋先生は気さくなながらも細やかな方で、メールでの打ち合わせも親しい先輩とやりとりをしているような錯覚を覚えました。

上橋先生は、読者との出会いをとっても大切にされているのだらうと感じます。記念講演をお引き受けいただくことができたのも、そのためでしょう。

今回は、先生のご意向もあり、記念講演を一字一句載録するという形式を取りません。

上橋先生のお話そのものは、記念講演にお出でいただいた方だけの宝物ということでご了承ください。

子どもの頃の上橋先生に大きな影響を与えたのは、おはなしを作るのがとても上手だったお祖母ちゃんだそうです。

上橋先生は、ウルトラマンや仮面ライダーなどが大好きで、まるで男の子のような子どもだったとか。(仮面ライダーのベルトをつけて立ちまわりをしていた経験がバルサ姐さんにつながったのでしょうか。)

本とマンガが大好きだったのに、家では禁止されていたそうです。

本を禁止された、というのもスゴイ話ですが、本を読むと何もしなくなるから、というのがその理由。それだけ本が大好きだったのでしょう。

中学校時代に、ローズマリー・サトクリフの作品(『太陽の戦士』『運命の騎士』など)に出会い、過酷な世界を生きる主人公たちの姿に大きな衝撃を受けたそうです。



サトクリフの作品との出会いが、やがて物語を作りたいという思いに繋がっていき、大学では史学を専攻されました。リアルな世界を創作できるよう歴史を学んでおこう、という執念と周到さに頭が下がります。

歴史を学ぶうち、自分は世界のことをほとんど知らないという認識に達した上橋先生は、世界をまるごと相手にする学問である文化人類学の世界に入っていきます。

オーストラリアの砂漠で先住民アボリジニの人々が行う狩りに同行するなどフィールドワークの経験が、作品の血肉となっているのだらうなとお話を聞いていて感じました。

今回の記念講演で、一番印象に残ったのは、『獣の奏者』が生まれるまでのエピソードです。

車の運転中、上橋先生の脳裏に浮かんだひとつのイメージ。

夜、崖の上で女性が堅琴を奏でている。山々には、女性を見つめるたくさんの獣の目が点々と光っている。

拙い表現で伝えきれないのが残念ですが、鳥肌が立つような荘厳なイメージだと思いますか？

しばらくして、上橋先生が養蜂の本を読んでいる時に浮かんだのは、おじさんが少女にミツバチのことを語りかけているイメージ。

そして最後に、雨の降る晩一人で寝ている少女のそばに母親が帰ってくる、というイメージが浮かんだ時、上橋先生は『獣の奏者』を書くことができる、と感じたそうです。

『獣の奏者』を読んだ方なら情景がよみがえってくるでしょう。

意外だったのは、イメージから『獣の奏者』という作品が生まれたということです。

上橋先生の作品世界はとても精緻なので、異世界を理論的に構築してからストーリーを組み立てるような印象がありましたが、最初にイメージがあったんですね。

上橋先生の作った世界が生き生きとしているのは、フィールドワークの経験に加え、豊かなイメージが出発点にあるからなんだと感じました。

豊かなイメージの源泉は、上橋先生が最初マンガ家志望だったことに加え、画家のお父様の影響もあるのではないのでしょうか。

ちなみに、上橋先生とお父様の上橋 薫氏とのコラボは『月の森に、カミよ眠れ』（偕成社）のハードカバー版で見ることができます。

表紙を描いているのがお父様です。(本文挿絵は金成泰三氏です。)この版は絶版となっていますが、埼玉県立図書館などで利用できま

すので、興味のある方はぜひ手にとってご覧ください。

このほか、食べ物に関する話や、『指輪物語』のトルキンと『ゲド戦記』のル・グウィンとの比較など興味深いお話を聞くことができ、あっという間の1時間半でした。

上橋先生、本当にありがとうございました。



上橋先生への花束贈呈。贈呈者をつとめたのは、熊谷市立玉井中学校の袖山連太郎さん。上橋先生の本の熱心な愛読者です。



講演終了後の上橋先生。各展示会場をじっくりとご覧いただくことができました。写真は上橋先生にもお誉めにあずかった著作の展示です。